

## 建築家のに求められること～施設と自宅、昔といま、日本とヨーロッパ

私の専門は建築の使い勝手と安全性なので、話に出てきたエピソードに関連して考えたことを述べてみたい。

新しく特別養護老人ホームを建設するに当たって、建築家が持ってきた基本計画案は、ユニットごとに平面計画が違っていった。それに対して、橋本さんが、「ユニットは同じでなければならない」と指摘して変更したという。

ケアする側とケアされる側とのいずれもが、レイアウトの違う部屋を使わなければならない場面が生じると戸惑うからだという。違っていたら非常な困難が生じるという発想は、確かに建築家には欠けている。

じつは建築家教育では、設計するときに「他と違うこと」が求められる。これは戦後の集合住宅建設に当たって、標準設計に基づいて似通った平面の住宅が大量につくられたことに対する反動という側面もあるが、自分の住まいを取得するときに、細部に至るまで自分の好みに合わせて作ってもらおうとする戸建ての設計時に極端にあらわれる。

つい先ごろ、パナソニック汐留ミュージアムで、「日本、家の列島」という展覧会が開催されていた。カタログの帯に、「なぜ建築家に建ててもらったのですか？」と書かれていた。それに答えた個性的な70軒の住宅が紹介されていた。

「ヨーロッパで話題を呼んだ展覧会です」ということだが、それはそうだ。ヨーロッパでは、「ふつうの人」が建築家に設計を頼むことはまずあり得ない。それは金持ちの特権なのだから。

日本でも、戦前までは都会の住宅の過半は借家であり、自分の家をつくるというのは一般人にとって例外だった。第二次世界大戦でほとんどの住宅が焼失し、とにかく住む場所をつくらねばならない、という事態に直面したときに政府が取った巧妙な政策は、住宅金融公庫による融資を通じた持ち家促進だった。最初は、ちっぽけな家しかできなかったはずだが、少し余裕ができてきたときに、少しでも他人と違う住宅にしたい、という強い願望が働いた。

それは団地の画一平面からの脱却でもあり、またプレハブ住宅の個別注文対応でもあった。コンピューター制御生産のおかげで、ミリ単位の寸法調整でさえたやすく行える：これによって本来は最大のメリットであったはずの大量生産による低価格化にブレーキがかかった。細かな要求に対応しないことにすれば、

プレハブ住宅は半額でできるというのが、私の見立てなのだが。。。

欧米を旅行して通り沿いにある不動産屋の物件紹介広告を見ると、日本との大きな違いがすぐにわかる。

日本では必ずついている平面図が、ほとんど添えられていない。代わりに外観写真があり、ざっくりした部屋の組み合わせ（3LDKなどに相当するもの）が記述されているのみだ。

つまり、中の使いようが住まい手の自由になる範囲で、建物の枠組みは最初から決まっている。当然だろう、石造りが基本の町では、日本のようなやりたい放題の建築は不可能なのだ。

戦後の日本では、住宅は消耗品に近い扱いを受けてきた。初期に住宅金融公庫を使って建てられた住宅は 20 年ちょっとで建て替え更新されたし、その後もずいぶん長いこと土地の上に立つ住宅の評価は 10 年でゼロと言われていた（現在でも、税法上は 20 年でゼロかな）。このことは、「手に入れた住宅に住み続けて、そこで死ぬという」避けようのない事実を直視するのを妨げてきた。

だから、「歳を取って 体力が落ちてでも住める住宅を」という主張は無視され続けてきた。今建てられている住宅はきちんと手入れすれば 100 年持つと思うし、ほとんど何もしなくても 50 年は使える（キッチン、トイレ、浴室などは 10 年から 20 年経てば故障するのは避けられないので、設備は更新しなければならないけれど）。

つまり、そこで生まれた子どもたちが死ぬまで存在する可能性が高いのだ。仕事の関係で出て行く必然性がないとすれば、死ぬまで住み続けられるようにしておくのは当然なのではないだろうか？ 少子高齢化の日本では、たぶんまもなく（オリンピック需要がある現在は例外だが）人口比で欧米並みの住宅新築戸数に落ち着き、建築家の仕事は既存建築物の改修が主体になるだろう。

与えられた条件を前提に、という時代がようやく来るのではないか。

そして、改修に値しない空き家は取り壊される運命だ（その中には私の母が今住んでいる佐賀の住宅も含まれるのだろうか）。

古瀬 敏（静岡文化芸術大学名誉教授）

--

Satoshi Kose, Dr.

Professor Emeritus, Shizuoka University of Art and Culture

<http://satoshikose.world.coocan.jp/>